

2024年 京都キリスト召団聖日集会 講筵要旨見出し

- 2024年1月28日 「広大無辺なる福音」
- 2024年2月4日 「主キリストは我らの避け所、また力、悩める時の近き助けなり」
- 2024年2月18日 「聖旨（御心）の体現者」として生きる
- 2024年2月25日 「廃墟から立ち上がる」
- 2024年3月17日 「詩篇第19篇に共感・共鳴す」
- 2024年3月31日 「天路を往く」
- 2024年4月14日 「信愛一如」
- 2024年4月21日 「御霊の賜う『自由』に生きる」
- 2024年4月28日 「真に求めるべきもの」
- 2024年5月5日 「『生命の御霊の法』に生きる」
- 2024年5月12日 「御霊の結ぶ実」
- 2024年5月19日 「聖霊にてバプテスマし給う主キリスト」
- 2024年5月26日 「まず『神の国と神の義』とを求めよ」
- 2024年6月2日 「望みて喜び」（ロマ書12章12節）
- 2024年7月7日 「我活くれば汝らも活くべければなり」（ヨハネ14・19）



広大無辺なる福音（イザヤ書40章以下）

2024年1月28日

イザヤ書40章～55章は「第2イザヤ」、56章～66章は「第3イザヤ」と呼ばれていますが、今回は、その中から何か所か取り上げることになりました。但し、キリストの受難の預言である53章は取り上げていません。第2、第3イザヤ書を読んで受ける感想は、その内容が実に「広大無辺」であることです。以下に幾つか取り上げて皆様と共に味わいたく存じます。

(1) 55章

「なぜ、あなたがたは、かてにもならぬもののために金を費し、飽きることもできぬもののために労するのか。わたしによく聞き従え。そうすれば、良い物を食べることができ、最も豊かな食物で自分を樂しませることが出来る。耳を傾け、わたしに来て聞け。そうすれば、あなたがたは生きることが出来る（2～3節）。あなたがたは主にお会いすることのできるうちに、主を尋ねよ。近く居られるうちに呼び求めよ。……われわれの神に帰れ。主は豊かに赦しを与えられる。」（6～7節）。8～13節（記述省略）

(2) 57章

「正しい者が滅びても、心にとめる人が無く、神を敬う人々が取り去られても、悟る者はない。正しい者は災いの前に取り去られて平安に入るからである。すべて正直に歩む者は、その床に休むことが出来る。」（1～2節）

「いと高く、いと上なる者、とこしえに住む者、その名を聖と唱えられる者がこう言われる。『わたしは高く、聖なる所に住み、また心碎けて、へりくだる者と共に住み、へりくだる者の霊をいかし、碎けたる者の心をいかず』（15節）。

(3) 60章

「起きよ、光を放て、あなたの光が臨み、主の栄光があなたの上にのぼったから。見よ、暗きは地をおおい、闇はもろもろの民を覆う。しかし、あなたの上には主が朝日のごとく昇られ、主の栄光があなたの上にあらわれる。」（1～2節）。60章19節～22節。

(4) 61章1～3節、10～11節。

(5) 62章1～5節

(6) 63章7～9節

(7) 64章

(8) 65章



主キリストは我らの避け所、また力、悩める時の近き助けなり

2024年2月4日

昨年の暮れ、除夜の鐘と共に旧き年月を後にし、新しい年を迎えて新しく出発しようとしたその朝、北陸地方、特に能登半島において激しい地震が発生しました。元日に「地震とそれによる甚大な被害の発生」とは、前代未聞の不幸な出来事と言うほかありません。

連日テレビに映し出される被害の状況を見ると、心痛む思いが致します。使徒パウロはキリストの集会を「人体」のように見て、集会員の一人一人は体を構成する「肢体」であるとし、

「もし一つの肢体が悩めば、ほかの肢体もみな共に悩み、一つの肢体が尊ばれると、ほかの肢体もみな共に喜ぶ。あなたがたはキリストのからだであり、ひとりびとりはその肢体である。」

と述べています（コリント前書12章26～27節）。私達は、宗教上の思想信条の如何にかかわらず、このたび被災された方々のことを思わないではおれません。

近時は地球上の各地で様々な災害が発生しています。そうした不安定な状況であるからこそ、一層、私達は「主キリストの護りと導き」を祈り、それを支えとして、勇気と希望をもつて進むほかありません。講筵題目の言葉は詩篇第46篇からの引用ですが、災いを避けるための「避け所」である主キリストの御懷の中に逃げ込めば、安らぎと共に新しく力を賜り、再出発が出来ます。主キリストは、

「あなたがたは、この世では悩みがある。しかし、勇気を出しなさい。わたしはすでに世に勝っている。」

との御言葉をもつて励ましてくださっています（ヨハネ伝福音書16章33節）。



「聖旨（御心）の体現者」として生きる

2024年2月18日

要点 イザヤ書55章8節以下には次のように記されています。

「わが思いは、あなたがたの思いとは異なり、わが道は、あなたがたの道とは異なっていると主は言われる。天が地よりも高いように、わが道は、あなたがたの道よりも高く、わが思いは、あなたがたの思いよりも高い。天から雨が降り、雪が落ちてまた帰らず、地を潤^{うるお}して物を生えさせ、芽を出させて、種まく者に種を与え、食べる者に糧^{かて}を与える。このように、わが口から出る言葉も、むなしくわたしに帰らない。わたしの喜ぶところのことをなし、わたしが命じ送った事を果す。あなたがたは喜びをもって出てきて、安らかに導かれて行く。山と丘とはあなたの前に声を放って喜び歌い、野にある木はみな手を打つ。いとすぎは、いばらに代って生え、ミルトスの木は、おどろに代って生える。これは主の記念となり、また、としえのしるしとなって、絶えることはない。」

この御言葉に接しますと、長く厳しい冬を耐え抜き、陽光の輝く春を迎えた樹々や草花が賜った生命を喜び、輝いている姿を思います。ここで注目したいのは、降り注ぐ雨も、「ただ降っている」のではなく、

「地を潤して物を生えさせ、芽を出させて、種まく者に種を与え、食べる者に糧^{かて}を与える」

というように、「その役割を果たした上で」再び天に帰って行くということです。主キリストの救いに与かり、新しい生命を賜った私達も、ただ「救い」の恵みに感謝するだけではなく、「聖旨^{みむね}の体現者」としての役割を果たした上で「天に帰り行く」使命を授かっているということです。主キリストはヨハネ福音書15章16節において、

「あなたがたがわたしを選んだのではない。わたしがあなたがたを選んだのである。そして、あなたがたを立てた。それは、あなたがたが行って実を結び、その実がいつまでも残るため」

であると語っておられます。即ち、天から降る雨がその役割を果たした上で天に帰り行くように、「天」（神・主キリスト）から新しい生命を頂いたわたしたちは、地上においてその果たすべき役割を果たし終えた後に、初めて、天上（永遠の御国）へと帰り行くという使命を賜っている、ということです。「御言葉・御霊と一如」で在らしめてください、との祈りをもって日々を生きるならば、自ずとその使命を果たすことが出来るのではないのでしょうか。



廃墟から立ち上がる

――能登地震の被災者の方々への応援歌――

2024年2月25日

今年は元日に能登地方を地震が襲ったほか、海外ではウクライナやイスラエルのガザ地方などでの紛争に見られるように、内外共に不穏な日々が続いています。

そのような状況の中でイザヤ書第40章以下や詩篇第46篇は、私達に慰めと希望、勇気を与えてくれるように思えます。何よりも主キリストが今もどん底に立って、すべてを包み、担い上げてくださっているように思えます。イザヤ書第40章、

「あなたがたの神は言われる、『慰めよ、わが民を慰めよ、ねんごろにエルサレムにかたり、これに呼ばわれ、その服役の期は終り、その咎は既にゆるされ、そのもろもろの罪のために二倍の刑罰を主の手から受けた』。呼ばれる者の声がする、『荒野に主の道を備え、砂漠に我々の神のために、大路を真っ直ぐにせよ。もろもろの谷は高くせられ、もろもろの山と丘とは低くせられ、高低のある地は平らになり、険しい所は平地となる。こうして主の栄光があらわれ、人は皆ともにこれを見る。これは主の口が語られたのである』」。

以下にも素晴らしい言葉が続きます。

「草は枯れ、花はしぼむ。しかし、われわれの神の言葉はとこしえに変わることはない。（以下、中略）……あなたは知らなかったか、あなたは聞かなかったか。主はとこしえの神、地の果ての創造者であって、弱ることなく、また疲れることなく、その知恵は測り難い。弱った者には力を与え、勢いのない者には強さを増し加えられる。年若い者も弱り、かつ疲れ、壮年の者も疲れ果てて倒れる。しかし主を待ち望む者は新たな力を得、鷲のように翼を張って、のぼることができる。走っても疲れることなく、歩いても弱ることはない。」

かつてランナーであった奥田は、この言葉でどれほど力づけられたか測り知れません。今も懐かしく思い起こし、勇気を奮い立たせています。イザヤ書第63章7～9節の言葉からは、「主はかれらのすべての悩みのとき、主も悩まれて、そのみ前の使いをもつて彼らを救い、その愛と憐みとによって彼らを贖い、いにしえの日、つねに彼らをもたげ、彼らを携えられた。」

によって慰めと勇気を頂いて来ました。また、

「神はわれらの避け所また力なり、悩める時の最近き助けなり。」

の詩篇第46篇も私への応援歌です。これ等の応援歌以上に私達を慰め励ましてくださっているのは、「御霊の主様」です。小池先生作の讃美歌

「使徒らの昔を慕いて我は、聖書に読み入り祈りてあれば、みたまの我が主は我が身を抱き、十字架に耐えうる力を賜う」（召団讃歌B2「使徒らの昔を」）

の通りです。また、コリント後書第4章／第6章も共感を覚える箇所の一つです。皆様も、御言葉と御霊に導かれて感謝と讃美の日々をお過ごしください。



詩篇第19篇に共感・共鳴す

2024年3月17日

本来、文語文の方が、詩の響きは良く伝わるのですが、以下には、現代の人向きに、口語文の方を記します。詩篇第19篇、

「もろもろの天は神の栄光をあらわし、大空はみ手のわざをしめす。この日は言葉をかの日につたえ、この夜は知識をかの夜につげる。話すことなく、語ることなく、その声も聞こえないのに、その響きは全地にあまねく、その言葉は世界の果てにまで及ぶ。神は日のために幕屋を天に設けられた。日は花婿がその祝いの部屋から出てくるように、また勇士が競い走るように、その道を喜び走る。それは天の果てからのぼって、天の果てにまで、めぐって行く。その暖まりをこうむらないものはない。主の掟は完全であって、魂を生き返らせ、主の証は確かであって、無学な者を賢くする。主の論は正しくて、心を喜ばせ、主の戒めはまじりなくて、眼を明らかにする。主を畏れる道は清らかで、とこしえに絶えることがなく、主の裁きは真実であって、ことごとく正しい。これらは金よりも、多くの純金よりも慕わしく、また蜜よりも、蜂の巣のしたたりよりも甘い。あなたの僕は、これらによって戒めを受ける。これらを守れば、大いなる報いがある。だれが自分のあやまちを知ることが出来ましょうか。どうか、わたしを隠れた咎から解き放ってください。また、あなたの僕を引きとめて、故意の罪を犯させず、これに支配されることのないようにしてください。そうすれば、わたしはあやまちの無い者となつて、大いなる咎を免れることが出来るでしょう。わが岩、わが贖い主なる主よ、どうか、わたしの口の言葉と、心の思いがあなたの前に喜ばれますように。」

この詩篇第19篇に私（奥田）は大いなる共感を覚えます。大自然を心の故郷として溶け合う心情の「大和心」と通じ合うところがあるように思えるからです。

また、太陽を讃えている心情にも共感を覚えます。主キリストも

「空の鳥を見よ、野の花を見よ」

と、大自然と一如である思いを吐露しておられ、また、

「天の父は、悪い者の上にも良い者の上にも太陽を昇らせ、正しい者にも正しくない者にも雨を降らしてください」

と、太陽の存在を天の父なる神の恵みであると讃えておられるからです。

私は、自宅も、集会所も、まことに恵まれた自然環境の中に在ることを、深く感謝しています。遠方から来会される方々が、これからの好季節、自然の素晴らしさを満喫していただければ嬉しく存じます。



天路を往く

——復活節集会に続き、「霊」の高みへ——

2024年3月31日

私達は、地上での「目に見える諸事象・諸現象」（外的なもの）に振り回されない生き方を貫くことが大切です。そのためには、見えない「御霊の導き」を信じて、これに全托することが欠かせません。ガラテヤ書2章20節の

「（旧き）我、主（キリスト）と偕ともに十字架に付けられたり。最早もはや（旧き）我、生くるに非ず、（御霊の）キリスト、我が内に在りて生くるなり。今、我、肉体に在りて生くるは、我を愛して我がために己が身を棄て給ひし神の子（イエス）を信する（信受・体受する）に由りて生くるなり。」

との使徒パウロの告白に共感し、これを我が告白とすることが求められます。コロサイ書3章1〜4節や同12〜17節も大切な指針です。

また、「天の次元、霊（御霊）の次元」において尊ばれるのは、コリント前書13章の「信仰・希望・愛」であり、その中でも最大なものは「愛」であるとされています。

私達の現実の生活において、このような「信仰・希望・愛」を貫くこと、とりわけ、「愛」を実践することは「至難の業」と言うべきかも知れませんが、「御霊の主キリスト」の御助けと御導きにより、そのような生き方が出来るように、祈りを深めて行きたいと思います。



信愛一如

——ヨハネ第一書——

2024年4月14日

今回は、ヨハネ第一書（第一の手紙）から、大切な個所を取り上げること致します。

（1）第1章 1～2節は、素晴らしい表現で主キリストのことを語っています。7節は、神は光であり、その光の中を歩むことの大切さを謳っています。

（2）第2章 5～6節では、イエス・キリストの御言葉を守る者には神の愛が全うされたこと、そして彼（御言葉を守る者）は主キリストが歩まれたように歩むべきである、と奨励します。15～17節では、世をも世に在る物をも愛するな、世に在るもの（肉の慾、眼の慾、所有の誇りなど）は空しい、と警告します。そして、聖霊という「真理の油」を注がれていることの大切さを力説しています。

（3）第3章 父なる神の大いなる愛の故に、我らは神の子であり、主の顕現し給う時、その似姿となること、この希望の故に、自己を清く保つように心がけること、そして、真実の兄弟愛に生きるべきことを説いています。

「主は我らの為に生命を捨て給へり、之によりて愛といふことを知りたり、我らもまた兄弟のために生命を捨つべきなり。」

との言葉は説得力があります。神の子イエス・キリストの名を信じ、その命じ給ひしごとく互いに相愛すべきであるとの神の戒めを守る者は、神に居り、神もまた彼に居給ふことを御霊は教えてくださる、と。

（4）第4章 第7節以下において、神は愛であること、我らも互いに相愛すべきことが力強く語られます。

（5）第5章 イエスをキリスト（贖い主、救い主）と信ずる者は、「世に勝つ」ことを宣言しています。そして、御子を信ずる者は永遠の生命を賜っていること、御意に叶うことを求めれば、神は必ず聴き給うこと、そして、必ず聴き給うと知れば、

「求めし願いを得たることをも知るなり」

と御子を信ずる事の素晴らしさを讃えています。



御霊の賜う『自由』に生きる

2024年4月21日

聖句

①ヨハネ伝福音書8章31節以下

「汝等もし常に我が言に居らば、眞にわが弟子なり。また眞理を知らん、而して眞理は汝らに自由を得さすべし」

「子（主イエス）もし汝らに自由を得させば、汝ら實に自由とならん。」

②ガラテヤ書5章1節

「キリストは自由を得させん為に我らを釈き放ちたまへり。されば堅く立ちて再び奴隷の軛に繋がるな」

③コリント後書3章17～18節

「主は即ち御霊なり、主の御霊のある所には自由あり。我等はみな、鏡に映るごとく主の栄光を見、栄光より栄光にすすみ、主たる御霊によりて主と同じ像に化するなり」

④ヨハネ伝6章63節

「活かすものは霊なり、肉は益する所なし、わが汝らに語りし言は、霊なり、生命なり」

一般に「自由」は、束縛・拘束からの「解放」、つまり、何物にも拘束されないで、思うまま、欲するままに振る舞うことが出来る状態を指しています。「〴〵からの自由」と「〴〵への自由」です。後者は、好き勝手なことをする自由ではなく、「他者」を活かす自由、言い換えれば、「愛への自由」であることが望ましいと言えます。使徒パウロは、上に掲げたガラテヤ書5章において、

「兄弟よ、汝らの召されたるは自由を与へられん為なり。ただ其の自由を肉に従ふ機会となさず、反つて愛をもて互に仕へよ。それ律法の全体は『おのれの如く汝の隣を愛すべし』との一言にて全うせらるるなり。（中略）御霊によりて歩め、さらば肉の慾を遂げざるべし」

と言ひ、御霊の果は、

「愛・喜び・平和・寛容・仁慈・善良・忠信・柔和・節制」

であるとし、

「己が肉のために播く者は肉によりて滅亡を刈りとり、御霊のために播く者は御霊によりて永遠の生命を刈りとらん。われら善をなすに倦まざれ」

と勧めています。



真に求めるべきもの

2024年4月28日

主イエスは、その宣教において、人々の求めるべきものとして、

「まず神の国と神の義とを」

と諭さとされるのと並行して、「聖霊」を求めるべきことを促うながしておられる。

マタイ伝7章7節以下の

「求めよ、さらば与へられん。……すべて求むる者は得、……汝等のうち、誰かその子パンを求めんに石を與あたへ、魚を求めんに蛇を與へんや。さらば、汝ら悪しき者ながら、善き賜物をその子らに與ふるを知る。まして天にいます汝らの父は、求むる者に善き物を賜たまはざらんや。」

の「善き物」は、ルカ伝11章13節では「聖霊」と記されている。

他方、主イエスはヨハネ伝14章以下の「訣別遺訓」において、「聖霊」のことを、「助主」たすけぬし「真理の御霊」みたまとして詳しく語っておられる。使徒パウロはロマ書8章において、「聖霊」のことを、「生命の御霊」いのち「神の御霊」と表現し、その重要性を強調している。

また、コリント後書3章17～18節において、

「主は即ち御霊なり。主の御霊のある所には自由あり。我等はみな……主の栄光を見、栄光より栄光にすすみ、主たる御霊によりて主と同じ像かたちに化するなり。」

との大希望を述べている。



『生命の御霊の法』に生きる

2024年5月5日

今回は「真に求めるべきもの」と題して、それは「聖霊」（助け主・真理の御霊）であることを語りました。今回は、その「続き」として、聖霊を頂いて生きるとは、どういうことを考えてみたいと思います。

わたしたちの身体は、^{からだ}空気に含まれ、空気を呼吸して生きています。空気から離れては、生きてゆくことが出来ません。それと同じ様に、わたしたちの「霊」は、「御言葉」を食らい（吸収し）、「御霊」に担われ、護られ、導かれることなしに「生きる」ことが出来ません。しかし、御霊は五感で感じる事が出来ないために、その必要性・重要性に気づかないまま過ぎてしまうことになりがちです。その結果、霊的活力が失われ、生き生きとした信仰生活から遠ざかってしまいます。このような事態に陥らないためには、恒常的に「み言葉（聖書、とりわけ新約聖書）」に接していることと「祈り」（御霊の主キリストとの霊的交流）が不可欠です。二千年前の遠いイスラエルの地で生き、語られたと伝えられている主キリストが、見えない「霊的存在」として現在も生きて働き給う、働いて私達を活かし、導いてくださるなどとは、普通の感覚では信ずる事が出来ない事かもしれません。それに対して私（奥田）は、こう考えています。即ち、肉体の姿で生きて働いておられた主イエスは、今はもう居られない。しかし、死より甦り天界に昇り給うた「霊なるキリスト」は、今も霊界において生きておられ、「霊」であり給うが故に、いつでも、どこにでも、ご臨在くださり、御業をなしてください。私達の祈りに答えてくださるお方である。あたかも、自然界の太陽が悠久の昔より変わることなく地球に生命力を与え続けてきたように、霊界の王者で在り給う主キリストは、地球上の万人に霊的生命を与えて活かそうとしてあり給う、と。

以上に述べたことは、ロマ書やコリント書において、使徒パウロが語ってくれているところ。主キリストも、

「神は霊なれば、拝する者も^{まこと}霊とをもて拝すべきなり。」

「活かすものは『霊』であつて、『肉』は役立たない。私が語った言葉は、霊であり命である」

と語っておられます。パウロは「御霊の結ぶ実」として、

「愛・喜び・平和・寛容・仁慈・善良・忠信・柔和・節制」

を挙げ、御霊によって歩むべきことを勧めています（ガラテヤ書5章22〜25節）。また、「人の^ま播く所は、その刈る所とならん。己が肉のために播く者は肉によりて滅亡^{はろび}を刈りとり、御霊のために播く者は御霊によりて永遠の生命を刈りとらん。われら善をなすに倦まざれ、もし弛^{たゆ}まずば、時いたりて刈り取るべし。」（同6章7〜9節）と。



御霊の結ぶ実

2024年5月12日

前回の講筵（「生命の御霊の法」に生きる）の終りの所で「御霊の結ぶ実」として、パウロはガラテヤ書5章22～23節で

「愛・喜び・平和・寛容・仁慈・善良・忠信・柔和・節制」

を挙げていることを記しました。今回は、この点に関連した主キリストの言葉を挙げ、私達の日常生活において、そのような「実」を結んでいることが、主キリストの証人^{あかしびと}としての私達にとって、とても大切な事であることを主キリストご自身の言葉から学びたいと思います。

主キリストは、マタイ伝7章15節以下において、

「偽預言者に心せよ、羊の扮装^{よそばい}して来れども、内は奪ひ掠む^{かす}る狼なり。その果によりて彼らを知るべし。茨^{いばら}より葡萄を、薊^{あざみ}より無花果^{いちじく}をとる者あらんや。斯く、すべて善き樹は善き果を結び、惡しき樹は惡しき果をむすぶ。善き樹は惡しき果を結ぶこと能はず、惡しき樹はよき果を結ぶこと能はず。すべて善き果を結ばぬ樹は、伐^きられて火に投げ入れらる。さらばその果によりて彼らを知るべし。我^{むか}に対ひて主よ、主よといふ者、ことごとくは天国に入らず、ただ天にいます我が父の御意^{みこころ}をおこなふ者のみ、之に入るべし」

と諭しておられます。

これらの主キリストの言葉は、人間にとって大切なことは、口先でどう言っているかではなく、内実が大切だという、ごく当たり前のことを語っておられるだけですが、人は、ともすれば、外面を良く見せかけようとしがちだという、人間の弱点を指摘し、内実が「善き」ものであるように、と諭しておられるのだと思います。では、どうすればよいのか？

これは、集会でいつも申している通り、生来の「肉なる我」が主キリストの十字架の贖罪^{あがない}を祈りの中で信受・体受することによって、

「(旧き・生来の) 我、主と共に十字架に付けられたり。最早、旧き我、生くるに非ず、新生の我、御霊に導かれて生きるなり」

との自覚を日々、新たにしてい、「み言葉、御霊に導かれて生きる」との信仰と祈りの中で生きるほかない、と私(奥田)は思い、その中で生きています。主キリストは、ヨハネ伝15章において、葡萄の樹(キリスト)と其の枝(キリスト信徒)の譬^{たと}えをもつて、私達が主キリストに、しっかりと繋がっているようにと諭しておられます。私達が主キリストに全托^{おゆだね}して行けば、主の御霊が導いて、「善き実」を結ばせてくださり、主の「証し人」としての使命を果たさせてくださることと信じています。



聖霊にてバプテスマし給う主キリスト

——ペンテコステ記念日に当たって——

2024年5月19日

ヨハネ伝福音書によれば、洗礼者ヨハネは、後に来り給う主キリストのことを、

- ① 世の罪を取り除く神の子羊、
- ② 聖霊にてバプテスマを施す者

として紹介しています（1章29節、33節）。主キリストは、ご自分の役割の自覚として、

「我は火を地に投ぜんとて来れり。此の火すでに燃えたらんには、我また何を
か望まん。されど我には受くべきバプテスマあり。その成し遂げらるるまでは、
思ひ逼ること如何ばかりぞや。」（ルカ伝12章49、50節）

とその思いを吐露しておられます。即ち人々の中に聖霊の火が燃えて欲しい。そのためにはまず自分が十字架に架かって、人々の罪の贖いを成し遂げなければならない。父なる神の御心を全てとし、ご自分は「ゼロ」、完全に父なる神の御心に捧げ切っておられた主キリストは、父なる神と「一如一体」であられたのに、それが引き裂かれて、味わったことのない「闇の中」に突き落とされなければならない。そして現実に主キリストは、

「我が神、我が神、なんぞ我を見棄て給ひし」

と叫ばれたとおり、神なき暗黒の世界へと突き落とされ給うたのです。この厳粛なる事実の前に、私（奥田）は、ただただ、ひれ伏すのみです。これからの私の人生において、どんな過酷な運命が待ち受けていようと、私の罪の贖いのために命を投げ出してください。

この主キリストの棄身の御愛に全托する以外にはありません。
歴史的に見れば、人類を救い給う神の御業は、

- ① 主キリストの降誕（クリスマス）、
- ② 主キリストの伝道の生涯、
- ③ 十字架による罪の贖い（贖罪）、
- ④ 主キリストの復活、
- ⑤ 主キリストの昇天、
- ⑥ 聖霊の降臨（ペンテコステの出来事）、
- ⑦ 聖霊の御業の展開（弟子たちの伝道）（使徒行伝）

というように展開されてきました。私達は、この⑦の中にいます。主キリストは弟子たちとの別れを前にして、「見える姿の主イエス」は見えなくなるけれども、「聖霊」（御霊）の姿（相）で、常に弟子たちと共に居ることを約束なさいました。それが、地上で現実化したのが「聖霊降臨」の事態（ペンテコステ）でした。そして、その事態は現在も進行中です。この事態を予告なさっているのが、ヨハネ伝14章から16章の「訣別遺訓」と称されている主キリストの言葉です。自然界の太陽は、現在も昔と変わりなく、地球を照らし続け、命を与え続けています。そのように、「霊なるキリスト（御霊の主キリスト）」は、今も変わりなく、私達一人びとりを命づけ、護り、導き続けてくださっています。感謝と讃美の日々でありますように！



まず『神の国と神の義』とを求めよ

——マタイ伝福音書第6章——

2024年5月26日

マタイ伝福音書第6章は、私達の現実の信仰生活において極めて重要な内容を提示している箇所です。厳しい戒律が重んじられていた状況の中で、人はともすれば「施し」にせよ、「祈り」にせよ、人前で仰々しく行うことによっていかにも自分は「戒律」を立派に守り、実現している優れた人間であることを誇示しようとしているが、それは「偽善」であって決して神の御心に叶うものではない。むしろそれとは反対に、人には目立たないように施しにせよ、祈りにせよ、「隠れたるに見給う汝の父なる神の前で行い、祈りなさい」と諭され、祈りについては、言葉数が多いから聴かれるというものではないとして、あるべき祈りを示されました。それが「主の祈り」として後代に受け継がれてきた祈りです。続いて6章16節以下では、当時の宗教的行為（行）としての「断食」に際しての心得のほか日常生活全般についての心得を語っておられますが、その背後にある御思いは、

「汝らの父（父なる神）は求めぬ前に、汝らの必要な物を知りたまふ」（8節、32節）

との「父なる神に対する絶対的信頼」でした。この絶対的信頼があるからこそ、

「まづ神の国と神の義とを求めよ、さらば凡てこれらの物は汝らに加へらるべし（口語訳では、「添えて与えられるであろう」）。この故に明日のことを思ひ煩ふな、明日は明日みづから思ひ煩はん。一日の苦勞は一日にて足れり。」

との絶対的保证が宣言されています。上記の文中の「まづ神の国と神の義とを求め」とは、どういうことなのか、私は、「主の祈り」にある、

「天にいます我らの父よ、御名が崇められますように。御国が来ますように。みこころが天に行われるとおри、地にも行われますように」

と祈ることだと理解してよいのではないか、と思っています。

もう一つ大事なことは、これまで述べてきた「まづ神の国と神の義とを求めよ」と仰せになったのは、人として地上に居られた主キリストが「天にいます父なる神（父神・霊神）」に対して、私達がどのように祈るべきかを教えられたのですが、十字架上で「贖罪」の大業を果たし、天界に昇られた主キリストは、

「凡て勞する者・重荷を負ふ者、我に來れ、われ汝らを休ません。」（マタイ伝11章28節）

と、「聖霊・助け主・真理の御霊」として、私達一人ひとりの傍近くご臨在くださって、慰め、励まし、道を開いてくださっていることをお忘れにならないように！ それ故、「まづ神の国と神の義とを求めよ」とは、「まず、御霊の主キリスト」に全托し、「あなたの御心、御思い、ご計画をどうぞ成就してくださいように」と主キリストに祈ることだと思っ



望みて喜び (ロマ書12章12節)

2024年6月2日

ロマ書第12章では、日常生活での心構えについて説かれています。その中ほどにおいて、「心を熱くし、主につかへ、望みて喜び、患難^{なやみ}にたへ、祈を恒にし、」という箇所があります。今回は、「望みて喜び」という言葉に注目したいと思います。

「望みて喜び」のすぐ後に「患難にたへ、祈りを恒にし」ありますから、現在の状況が楽しく好ましい状況にあるから、それを喜びとせよとか、今後もそれが長続きするように望み、かつ願うように！と言っているのではなく、逆に、たとえ現在の状況が好ましくなく、或は、過酷なものであっても、なお、「望みて喜び」と励ましてくれているのです。

このように、逆境にあっても、なお、「望みて喜び」ことが出来るのはなぜでしょうか？

それは私(奥田)においては、御霊の主キリストが常に共に居てくださるからです。

さらに、「望み」の内容が「現世を超えたもの」、いわゆる「来世」(肉体の生を終えた後に住む別次元の世界、天界、霊界)に入った時に現実となる(実現する)ものだからです。

そこで先に天界に召された愛する者と再会できることが、私にとっては「大いなる喜びであり、希望」です。正に「望みて喜び」事態です。私自身のことばかり語って恐縮ですが、この地上での生が残り少なくなってきた私にとっては、かつ、「現役の役目(職業)」を終えた私にとっては、「望みて喜び内容(事態)」は、来世において実現・成就する事態であると言うほかありません。更に私の願望を告白させていただけるならば、私が天に召された後に京都キリスト召団が奥田の志を受け継いで、主キリストの福音の証しの業を力強く展開してくださることです。その原動力は、「十字架・聖霊」一如の霊的根源現実を祈りの中で受け取って行くことです。その内実は、コリント前書第13章の「信仰・希望・愛」や、ペテロ前書第1章3〜9節に述べられている通りです。



望みて喜び (ロマ書12章12節) (続)

2024年6月9日

(要旨) 今回は、前回に続いて、「望みて喜び」に注目し、私達は「何を望み、何を喜びとしているか、或は、すべきなのか」を考えてみたいと思います。皆様は、いかがでしょうか？
これと考えると、どうしても、私達の住む世界は、地上界と天上界との二層から成り立っているものと想定せざるを得ません。私達が現に住む世界は「地上界」で、それとは別に(別次元に)「天上界」が存在するものとしておきましょう。主キリストは天上界に居られたけれども、父と呼んでおられた「神」の御旨^{みむね}に従って「地上界」に来てくださいました。それは、地上界に住む者に「天上界の命」を与え、地上界の生命(肉体)が終わった時に、すべてが「無」になるのではなく、天上界において生き続けるためでした。しかし、そのためには、天上界において生き続けるにふさわしい者とされていなければなりません。それを妨げているのが、「罪」(自我、神に逆らう性質)であり、それを取り除くために主キリストは十字架に架かって私達の罪を引き受けてくださいました。それだけではなく、私達を「天上界(天国)」に住まうにふさわしい者とするために、「聖なる霊の命」を賜りました。

地上の生において既に「聖なる霊の命」を頂いているが故に、地上の命(肉体の命)が終わった時に、直ちに「天上界」へと迎え入れられる、そして天上界は「光の国」であり、そこには主キリストがご臨在されるとともに、先に天界に召された愛する者たちも居る。いるだけではなく、素晴らしく成長した輝く姿で私達を迎えてくれる。そんなイメージを私(奥田)は抱いています。「天上界」のことについては、新約聖書においても詳しくは語られていませんが、コリント後書第12章において、使徒パウロが「第三の天」にまで引き上げられた(取り去られた)時のことを語っています。

私達が現在住んでいる世界(地上界、現象界)は「形ある世界、見える世界」ですが、天上界は「形なき、見えない世界、根源界」だと言えます。使徒パウロは、コリント前書第15章において、「死人の復活(甦り)」について語っていますが、ここでは、「形あるもの」が先に在り、「形なき者」が後に続く、しかも、それが「根源的なもの、永遠なるもの」と力説しています。

以上、長々と書いてきたのは、私達が賜っている「霊的現実」は、決して、単に「思われた世界(架空の世界)」ではなく、「**実在の世界**」だと言うことを皆様にも「確信」していただきたいからです。それら、すべては、主キリストの恵みの御業のお陰です。そして、主キリストは「聖霊・助け主・真理の御霊」となって、信ずる一人一人の中に宿り、地上の旅路を共に歩み、支え、護り、導いて下っています。「御霊の主キリスト」ご自身が、私達の「望み」であり、「喜び」であります。



「永遠の生命」を賜って生きる

2024年6月16日

（要旨）ヨハネ福音書第6章において主キリストは次のように語っておられます。

「われは生命のパンなり、我に来たる者は飢えず、我を信する者はいつまでも渴くことなからん。（中略）父の我に賜ふ者は皆われに来たらん、我に来たる者は我これを退けず。それわが天より降りしは、我が意をなさん為にあらず、我を遣し給ひし者の御意を為さんためなり。我を遣し給ひし者の御意は、すべて我に賜ひし者を、我その一つをも失はずして、終りの日に甦へらする是なり。わが父の御意は、すべて子を見て信する者の永遠の生命を得る是なり。

われ終の日にこれを甦へらすべし。」（35～40節）

この主キリストの御言葉によりますと、主キリストが天界より地界へと降つて来てくださったのは、キリストを信受する者が「永遠の生命」を得るためであり、「永遠の生命」を頂くとは、「終りの日に甦ること」であり、それが主キリストをお遣わしくくださった父なる神の御心（御意）であるということです。

しかし、「永遠の生命」を賜ることが、単に「終りの日に甦る」ことにすぎないのならば、「終りの日」（世の終り、終末）の到来までは、死後、「眠り続ける」だけなのでしょうか？

私は、そうは思いません。主イエスは、ラザロを蘇生させたもうた際、マルタ、マリヤに対して、

「我は復活（甦り）なり、命なり、我を信受する者は、死ぬとも生きん、凡そ生きて我を信受する者は、永遠に死なざるべし。」

と語られました。私達すべての者の「罪と死」を背負って十字架上で死を味わってくださいった主キリストは、栄光で輝くお姿で現れてくださいました。そして天界に昇り、天界より聖霊の姿（相）で地上に来てくださり、一人びとりに密着して護り、導いてくださっています。それだけではありません。ご自身と同質の生命（永遠の生命＝霊的生命）を賜り、肉体の死の後も存続する（生き続ける）者としてくださいました。

人生の終末期に差し掛かると、身体面では何かと支障が生じます。しかし、御霊の主キリストの支えにより、それらの制約を乗り越えて、主キリストの御心に叶う生き方を貫きたいものと願っています。

「活かすものは霊なり。肉は益する所なし、わが汝らに語りし言は、霊なり、生命なり。」（ヨハネ伝6章63節）

のとおり、日々、「命の霊言」を食らって、「永遠の生命」を生き抜きたいと願ひいたします。



今は見る所、臆なり、されどかの時には我が知られたる如く全く知るべし

2024年6月23日

講筵題目の「み言葉」は、コリント前書13章からの引用ですが、現在、私達が生きている「現実世界」と、やがて私達が入るであろう「天界（霊界）」の二つの世界を対比して、「天界（霊界）」の素晴らしいさを教え、現世に生きる私達に勇気と希望を与えてくれる素晴らしい「御言葉」であると、私（奥田）は思っています。

私は、私達キリスト信徒は誰であっても、過去のどこかの時点で、主キリストに出会って頂き、それまでとは違う「新しい人生」への歩みをさせて頂いた者たちである、と思っています。それ以来、それぞれが「天界（天国）」の状況を想像し、それを生きる上での「拠り所（希望）」として歩んできたのではないか、と思います。そこで各人が「思い描いた天界」（見る所）は様々であったと思います。明確なものではなく「臆^{おぼろ}」であつたかもしれません。「しかし」と上に掲げた御言葉は言います。

「我が知られたる如く、全く知るべし」
と。私達は、

「主キリストを信じた、そして今も信じている」

と申しましたが、「その知る所」は、まことに「臆なり」と言うほかないと思います。主キリストの側では、私達のことを「全く（完全に）」知ってくださっているにも拘^{かか}わらず、私達の側では、主キリストを知る知り方は、「全く不十分、不完全」と言うほかないのが現実です。にもかかわらず、主キリストの「慈しみ、護り、導き」は何と素晴らしい、有難い事か、と思わざるを得ません。そういう不完全、不信仰な私達であっても、

「かの時には、我が知られたる如く、全く知るべし」

と恵み深い御言葉は宣言してくれます。

ここで一言しておきたいことは、「我が知られたる如く」とある神・キリストの側での「我を知ってくださいっている知り方」は、欠点を見つけて裁くような知り方ではなく、どこまでも私達を活かそうとして知ってくださいる知り方であるということです。詩篇の第139篇に在る「知り方」がそれです。

人生の「最晩年」に差し掛かった私（奥田）にとって、本日の「講筵題目」の御言葉は、本当に有難い「恵みの御言葉」であり、

「活かすものは霊なり、肉は役立たず。我が汝らに語りし言葉は、霊なり命なり。」（ヨハネ伝6章63節）

の御言葉と共に、生きる上での原動力となっています。



我が時はすべて汝の聖手にあり

——全托の信に生きる——

2024年6月30日

講筵題目に掲げた聖句

「我が時は、すべて、汝の聖手にあり」

は詩篇第31篇15節の聖句ですが、これを「新約聖書」の光の中で見れば、私達が現在、地上で賜っている「生」は、どんな時でもすべて、主キリストの十字架の贖罪によって

「支えられ、担われ、護られている恵みの時」

であるとして、感謝して受容すべきものと思わされます。

こんな風なことを書き記しますのも、地上の生においては、誰しも、様々な試練に見舞われ、時として、主キリストの御護りと御導きに対する疑いの思いが生じかねないからです。そのような厳しい現実の中で、上に掲げた聖句は、何と力強く、主キリストの御愛と御護りに対する信頼（全托の信）へと立ち返り、それを貫くようにと激励してくれていることでしょうか！

以下に、詩篇第31篇から、私達にとって励ましとなる箇所を拾い上げてみましょう。

「主よ、われ汝に依り頼む、……汝の義をもて我を助けたまへ（1節）。……

願わくは我がために堅き磐となり、我を救う保障の家となり給へ。汝は我が磐、

我が城なり、されば聖名の故をもて我を引き我を導きたまへ（2～3節）。……

……われ靈魂を汝の聖手にゆだね、主まことの神よ、汝は我を贖ひたまへり

（5節）。……されど主よ我汝に依り頼めり、また汝は我が神なりと言へり。

我が時はすべて汝の聖手にあり、願わくは我を仇の手より援け、我に追ひ迫

るものより助けいだし給へ。汝の僕の上に聖顔を輝かせ、汝の仁慈をもて我

を救ひ給へ（14～16節）。」

「神・キリストに対する信頼（全托）の生き方」という点では、主イエスが父なる神にお寄せになった全面的な信頼の御姿に学ぶべきものと思います。主イエスは、常々、

「汝ら、心を騒がすな、神を信じ、また我を信ぜよ。天の父は、汝らに必要な

ものを悉く存じである。空の鳥を見よ、野の花を見よ。」

と諭され、

「まず、神の国と神の義とを求めよ。必要なものは、すべて、添えて与えられるから」

と説かれました。私達は、常に、福音書における主キリストの御言葉と、主ご自身の父なる神に対する全托の信の御姿に立ち返り、主キリストの喜び給う「全托の信」をもって貫きたいものと念願致します。



我活くれば汝らも活くべければなり (ヨハネ 14・19)

2024年7月7日

関連聖句

ヨハネ伝 6章 37～40節 「永遠の生命」 Ⅱ 終りの日の甦り。

「我を遣はし給ひし者の御意は、すべて我に賜ひし者を、我その一つをも失はずして、終りの日に甦へらする是なり。わが父の御意は、すべて子を見て信ずる者の永遠の生命を得る是なり。われ終の日にこれを甦へらすべし。」

ヨハネ伝 10章 27～30節、

「わが羊はわが声を聞き、我は彼らを知り、彼らは我に従ふ。我かれらに永遠の生命を与ふれば、彼らは永遠に亡ぶることなく、又かれらを我が手より奪ふ者あらず。彼らを我に与へ給ひし我が父は、一切のものより大なれば、誰にても父の御手よりは奪ふこと能はず。我と父とは一つなり。」

ヨハネ伝 11章 17節以下 (イエス、ラザロを甦らせる)。

マルタに対するイエスの言葉。

「我は復活なり、生命なり、我を信する者は死ぬとも生きん。凡そ生きて信する者は、永遠に死なざるべし。汝これを信するか」

ヨハネ伝 14章 16節以下 (聖霊・助け主・真理の御霊)。

「我汝等を遣して孤児とはせず、汝等に来るなり。暫くせば世は復我を見ず、されど汝らは我を見る、我活くれば汝らも活くべければなり。その日には、我わが父に居り、汝ら我に居り、我汝等に居ることを汝ら知らん。」

以上に掲げた「御言葉」のうち、とりわけ私(奥田)の心を打つのは、「講筵題目」として掲げた

「我活くれば汝らも活くべければなり」

の御言葉です。そこには、

「どんなことがあっても、どんな時でも、お前(奥田)を活かさないではおかないから。我(主キリスト)に全托せよ! 大安心の中に生きよ!」

との強い熱い御愛を感じるからです。

(完)

